

文化資料室ニュース

第2号 2007年2月・札幌市文化資料室発行



開拓記念碑 (大通公園西6)は榎本武揚の書ではなく、 王羲之(おうぎし)の拓本だった (新札幌市史編集員 西田秀子)

大通公園の一角に建つ開拓記念碑は、札幌で最も古い記念碑である。今から120年前の明治19年(1886)9月、最初の都市公園である偕楽園(北区北6西7、市文化財第1号の清華亭がある)内に建設された。その後明治34年(1901)、石碑の台石が損壊したため、補修を兼ねて、公的土地である大通(火防線)に移設され(北海道毎日新聞 明34.7.27)、以来、現在に至っている。

石碑には、開拓記念碑の5大文字と建設年月以外に手がかりはなく、撰文の銘もないことから、書き手については、いつしか不詳とされ、明治30年代には黒田清隆の筆ではないかとの説も流れたようだ(河野常吉資料)。

近年では、「文字は、榎本武揚の書ともいわれるが明確ではない」と、『札幌市史 産業経済篇』(1958年刊)が書いて以降、多くの書物が引用し、次第に「榎本武揚の書である」と断定されて、なか



開拓記念碑の募金を報じる
函館新聞(明治16年4月28日)

ば定説化してしまっ
た。

しかし今回の調査により、筆は榎本武揚ではなく中国の書聖といわれる王羲之(おうぎし、303~361年、生没年に諸説あり)の拓本であることが判明したので、

以下に根拠の資料を紹介しておきたい。

開拓記念碑は、開拓使が廃止され、函館・札幌・根室県の三県分治に移行した明治15年の10月、設置が発起され、建設費用4000円を目標に募金が開始した。発起人は札幌神社(北海道神宮の前身)宮司・杉戸大角、幹事に准陸軍大尉・荒城重雄、札幌県一等属・細川碧、札幌区長・山崎清躬(きよみ)である(函館新聞 明15.10.18)。当初の建設予定地は札

幌神社内とされた。だが、思うように募金が集まらなかったためか、建立の実現は4年後となった。

次の明治19年9月8日の『時事新報』(慶應義塾発行、北大図書館所蔵マイクロフィルム)が、開拓記念碑の建立当時の様子を報じている。

開拓記念碑

今度北海道札幌に建設すべき開拓記念碑は、地盤より高さ二十一尺八寸五分にして、地盤十尺八寸、碑石の大きさ三尺二寸五分角、長さ十二尺一寸五分なりと。またこれが前に石造の眼鏡橋を架し碑面には開拓記念碑の五大文字を彫鑿せり。右文字は菱池奥並継翁が拓字法を用いて、淳化秘閣帖中黄庭経及び曹娥碑中の字を取りて、四百倍の大きさに書したるものなるが、点画、筆力等、真に王右軍の真蹟に髣髴たりと。右建設の費額は金三千元を要し、北海道有志者の義捐金を以って成り立ちたるものよし。

(明治19年9月8日 時事新報)

記事中の右軍とは、右軍將軍であった王羲之の官名尊称であり、「黄庭経」は老子の不老長寿の養生訓、曹娥碑とは水死した父の屍を求めて入水した娘・曹娥にまつわる石碑である。これら二種の拓本から5文字をひろい、元開拓使官吏・奥並継が、拓字法を用いて400倍に拡大したというのである。

2007年1月現在、上記の曹娥碑の拓本は東京国立博物館(上野)のインターネット上で公開されており、「黄庭経」は書家・鎌田舜英氏のホームページで臨書、拓本ともに公開されている。そこで、「開拓記念碑」の文字と比較してみると、独特の隷書(細楷)の書体が合致する。これで奥並継の拓字が確認できた。

奥は開拓使廃止後に大蔵省に転じ、『開拓使事業報告』7編を編纂、明治27年に没した。

では、なぜ黒田説や榎本説が浮上したのかについては、今後の課題としたい。

存続が決まった市電の有効活用策が論議されているところだが、最近「かつて市電路線を琴似まで延長する話があったと聞いたが、その年代や経路に関する資料はあるか」という質問をいただいた。

本市の市電の前身は、札幌電気軌道株式会社がキロ程5.3kmで大正7年8月から営業を開始した路面電車で、昭和2年12月より市営となり今日に至っている。開通以来、何度も路線が拡充され全盛時の昭和30年代末期には25.03kmまで延びているが、琴似線が実現されたことはない。果たして琴似線敷設の話はあったのだろうか。

<資料1> 「さっぽろ文庫22市電物語」第3章 市電の軌跡「白日にさらされた琴似線」

『昭和35年に...琴似・鉄北・丘珠・白石の四方面への電車延長計画が公表されたが、その建設順位は内部的には琴似線を第一順位と...』『建設ルートには、北5条線を延伸し北5条西23丁目を経由して琴似川をまたぎ、発寒橋に至る3.1^{キロ}を予定していた』『建設予算は...市議会で議決...』とある。予算まで決まりながら着工できずにいる内に鉄北線に先を越されたのだが、きわめて現実的な話だったということが分かる。

市電延長については、きっと地域からの強い要望もあったはずだ。実現に向けての地域の取り組みの様子や、計画が進まなかった事情等をその頃の新聞記事から拾った。

<資料2> 「北海道新聞」「琴似タイムス」 * 関連する主な記事の見出し

「市電琴似方面への延長 順調なら明後年 市でも実現におわせる」(昭32.10.9道新)「市電延長期成会発足す」(昭32.10.25琴夕)「市電問題早くも暗礁え 路線計画と営農地主の折合つかず」(昭32.11.20琴夕)「ことし中に実現を申合せ 琴似町電車延長期成会」(昭33.3.24道新)「進めぬ区画整理 琴似への市電、水道延長お預けの公算大」(昭33.4.26道新)

昭34.7.5の琴似タイムスには『路線は市の区画整理に則って...北5条西高校前から...日新小学校横を通り抜けて琴似本通りに至る...、路線幅員27mにディーゼルカーを配す』とある。

<資料3> 「琴似町史」第7章 通信、交通、土木（昭和31年 札幌市刊）

上記の昭和30年代の延長に関しては載っていないが、なんと早くも昭和初期に琴似まで電車を通す話があったことが記述されている。『本町山手の国立琴似療養所設立^(註1)、地元耕作者は...市販する蔬菜の声価に影響すると大反対を起し、険悪な空気があったが、当時札幌市では、交換条件として電車線を延長し、琴似まで電車を通すということで打決（原文まま）されたが、大東亜戦争の勃発によってこの約束は反古になり...』とある。

だが、新札幌市史第4巻の市立結核療養所設置に関する項には電車延長を受結条件としたことは書かれていない。同書の交通機関の項にも療養所絡みの話はない。また昭和3年10月30日の北海タイムスの市会記事には、『療養所の問題解決策として市より北5条琴似街道修繕費として琴似村に3千円を寄付することとした』とある。表面に出ない形での約束だったのか、「琴似町史」の記述を裏付ける資料は探し得なかった。だが、その話とは別に琴似線の計画（関連があるかも知れないが未確認）があったことが分かった。

<資料4> 「新札幌市史第4巻」第3章第3節 市内の交通機関 札幌郊外電気軌道株式会社^(註2)

『(昭4年)同社は、琴似駅前～南1条間も営業許可を申請し、琴似村の村民からも軌道速成が陳情された』『8年5月円山3丁目琴似駅間軌道工事が認可された』とある（5年10月3日に軌道敷設特許の指令...北海タイムス5日付）。しかし工事に着手できず、その後特許も喪失して実現されなかった。市営ではないが、すでに昭和初期に具体的計画があったことになる。

昭和4年及び35年のどちらの計画も実現一歩手前まで行きながら結局は幻に終わったが、51年に地下鉄に姿を変えてやっと登場したのである。 （郷土史相談員 今倉迪夫）

* 注1 当時は札幌市立で大正12年に設立計画、昭和3年秋受結、5年開所。* 注2 札幌温泉電気軌道(株)として発足し、後に社名変更。

* 他の資料「札幌市交通事業三十年史」、「鉄道ピクトリアル 426」

島判官の更迭について

(文化資料室長 黒澤昌利)

札幌市では、市民の皆様の要望に応じて、地域に出向き、市の施策や事業について説明を行う「出前講座」を実施しておりますが、当室におきましても、昨年の11月に実施させていただきました。

当室の出前講座の内容としては、文化資料室の事業の説明、またそれに関連しまして、開拓使時代の札幌の歴史の話をしていただきました。

その際に、当日の出前講座の内容にはなりませんでしたが、開拓使時代の歴史について「新札幌市史」等により色々調べてみました。その中から特に興味を感じましたことについて、ご紹介させていただきたいと思います。



島 義勇

「新札幌市史」第2巻通史2の記述に、『一月十二日に東久世は函館を出帆して上京の途についた。』とあります。また東久世の日記から上京の目的は、『島が長官の下知を聞かずに独断専行し、財政の窮乏をもたらしたので、財政を補填するか、島を処置するか、いずれかの決定を求めての上京である』とあります。

東久世とは、開拓使の第2代長官として、島とはご存知のとおり札幌本府建設の開拓判官島義勇であります。

「新札幌市史」の記述にもどりますが、『東久世の強い島罷免の要求に対し、政府は早くも一月十九日付をもって島に「御用有之、帰京被仰付候事」(百官履歴)と指令した。』とあります。これにより島は、建設の緒についたばかりの札幌を後にして、志半ばにして帰京するわけですが、気になったのが、帰京後の島の動向です。これについては、次のように記述されております。

『さて三年三月二十五日に帰京した島は、その後の動向を十文字大主典をはじめ一四人の錢函・札幌詰の官員宛に、四月付で次のように報じている。』とあり、書簡の一部が紹介されておりますが、その内容は『島は三条・岩倉両公と会い、「見込書」を差し出すよう指示され、詳細に事情説明をなしたと、東久世その他の者とも面談し、東久世は後悔をしているとのこと、余程のことがあったとみえ(長官もしくは開拓使は)散々の評判であること、島に対し色々な讒言が浴びせられたけれども朝廷はそれらを信用しなかったこと、弾正台からも公平真実の開陳があったこと、以上の諸情況によって、島は責を問われるどころか、官位相当によると一等上がって大学少監に昇任したことを告げ、そして自分の行為を支えてくれた現地の官員達に感謝の意を表しているのである。その大学少監への昇任は四月二日であった。』とあります。

東久世長官から独断専行し財政の窮乏をもたらしたとして強く罷免を要求された島を、政府は更迭します。しかし島は責任を問われるどころか、転任先は、なんと一等上位の職、大学少監に昇任いたします。なんとも不可解な人事であります。

この不可解な人事は、気骨ある葉隠武士の典型と言われた島義勇の人望がそうさせたものなのか、また鍋島直正を中心とする佐賀藩出身の彼の人脈が政府に対して運動した結果なのか、いずれにしても残念ながらこの当時のことを明らかにする史料は、まだ見つかっていないと聞いております。

政府は東久世長官の顔を立て、島を更迭しますが、その一方で、札幌本府建設に心血を注いだ島判官の顔も立てたのではないのでしょうか。この昇任は、志半ばで更迭される島に対するはなむけだったのかもしれない。

島が帰京したのは、旧暦の3月25日で4月2日には昇任しておりますので、その間わずか1週間程度、その間にこの島問題が決着するのですが、政府の中ではどんな話になっていたのでしょうか。気にかかるところであります。

また、昇任したとはいえ、志半ばで札幌を去ることとなる島の心の辛さは変わらないものと思います。この出来事を島はどう理解し、どう考えていたのでしょうか。興味は尽きません。



島義勇像
(札幌市庁舎1階ロビー)

企画展
情報



「足立伊佐武氏写真展」開催（2月6日～3月30日）

昭和初期の札幌市民の生活の様子をとらえた写真を展示します。



旧豊羽小中学校展を開催しました。平成14年に閉校した旧豊羽小中学校の企画展を、12月1日～1月31日の間、文化資料室オープンスペースで開催しました。学校行事を撮影した8mmフィルムやスライド写真、学校で展示されていた風景写真などを展示しましたが、その多くが、年代や内容など詳しいことがわからない資料でした。

「詳細不明の資料を展示するなんて変だな」とお思いになるかもしれませんが、実は、展示会を開催することで、豊羽地区を詳しくご存じの方に来館して頂き、お話を聞かせてもらうことが目的の一つでした。実際、見に来てくださった卒業生・元住民の方からいただいた情報で、詳細が明らかになった資料があります。また、文化資料室が所有していなかった8mmフィルム映写機を貸与・寄贈頂けるとのお申し出もいただきました。ご協力頂いた皆様、本当にありがとうございました。



追加資料もありますので、機会があればもう一度、豊羽地区についての企画展を開催したいと思っております。

新札幌市史機関誌『札幌の歴史』第52号

3月8日（木）
～発売開始

特集・札幌の歴史 新たな出発のために 2

陳情・請願にみる札幌市地域住民の教育要求
開拓使の洋式農業導入における札幌官園と現術生徒の役割
戦後札幌市の農業関係資料 - 行政資料を中心に
札幌市の青年学級

投稿・烈々布と丘珠 札幌市東区のアイヌ語二地名について
『わがまち温故知新』農業近代化に貢献したお雇い外国人の意志を今に
～エドウィン・ダン記念館運営委員会

市史、発足のころ

内容に関するお問い合わせは文化資料室までお願いいたします。

文化資料室と市政刊行物コーナー（札幌市役所本庁舎2階）でお買い求めいただけます。47～51号も販売中！

【お問い合わせ】
文化資料室（011-521-0205）
市政刊行物コーナー（011-211-2135）

文化資料室 利用のご案内

- 開館時間 8:45～17:15
- 休館日 土・日・祝日・年末年始（12月29日から1月3日）
- 入館料 無料
- 郷土史相談室・札幌の歴史展示室がご利用いただけます
- ご来館の際は公共交通機関でお越しください



交通アクセス / 東豊線「豊水すすきの」駅下車6・7番出口から徒歩3分、または南北線「中島公園」駅下車1・2番



文化資料室ニュース 第2号・2007年2月

発行 札幌市文化資料室 〒064-0808 札幌市中央区南8条西2丁目

Tel・文化資料室事務室 011-521-0205・市史編集室 011-521-0206・郷土史相談室 011-521-0207

Fax・011-521-0210 E-mail・shiryoshitsu@city.sapporo.jp URL・http://www.city.sapporo.jp/bunkashiryo/